論　説

スロイス戦におけるイングランド王立艦隊

川　瀬　　進

目　次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．フランスとの関係
　a）ノルマン王家
　b）アンジュー王家
Ⅲ．スロイス戦
Ⅳ．おわりに

Ⅰ．はじめに

14世紀初頭のイングランドは，エドワード2世（Edward Ⅱ, 1307－1327）の利己的な政策により，王室財政が窮乏していた。彼の父エドワード1世（Edward Ⅰ, Longshanks, 1272－1307）が賢王として，王の資質にたけていただけに，彼の自業自得な行動は，イングランドの国民，特に貴族から批判のまとになっていた。

エドワード1世が行った政策のうち賢王として評価される点は，主として2点ある。その1つは，対外政策として，先々代からのイングランド王，すなわちジョン王（John, Lackland, 1199－1216）と，ヘンリー3世（Henry Ⅲ, 1216－1272）とから失われていった少ないフランスでの領土を，ヨリ少なくさせることなく，また完全に消失させることもなく保有し続けたことである。フランス内でイングランド領土を保持し続けるということは，広義の意味で，フランスとの軍事バランスが均等であり，またフランスとの関係が

正常・安定であったということをも意味する。他の1つは，対内政策として，国民生活をヨリ大きく安定させるために，1295年に立法による議会を開催させたことである。この1295年の議会は，後に“模範議会（The Model Parliament)”と呼ばれるほど，イングランドにとって画期的なものであった。また，この画期的な模範議会を経て，次々新しい法律を施行したエドワード1世を称賛して，彼を古代ローマ法を制文化させたビザンティン皇帝ユスティニアヌス（Justinianus Ⅰ, 525－565）にたとえて，“イングランドのユスティニアヌス”あるいは“イングリッシュ・ジャスティニアン(English Justinian)”と呼んでいる。

これらのことに反して，エドワード2世は，国内外の政策に関して利己的な政策を執り，諸貴族から反感を買い，離反されていった。この離反の最大原因は，彼が一介の騎士ピェール・ドゥ・ギャヴスタン（Piers de Gaveston, c. 1284－1312）を偏愛・寵愛したからである。このことは，ギャヴスタンを追放した父エドワード1世の命令を無視して，彼に伯位を与えたことからもわかる。

またエドワード2世は，1314年スコットランドの中部バノックバーン(Bannockburn）戦で，ロバート・ドゥ・ブルース（Robert Ⅰ, or Robert de Bruce, 1306－1329）に大敗を喫したり，1308年に后にしたフランス王フィリプ4世（Philippe Ⅳ, le Bel, 1285－1314）の娘イザベル（Isabella of France, 1292－1358）からも，目に余るギャヴスタンへの偏愛・寵愛に愛想をつかされ，離反されてしまった。結果的に彼は，イングランド王の中でも評判の悪い愚王と称されるようになった。

イングランド国内の諸貴族から反感を買われたり，また父エドワード1世の命令を無視したということは，当然イングランド国内の混乱を引き起こし，王室財政を逼迫させたということを意味する。

このような社会的混乱の中，エドワード3世（Edward Ⅲ，1327－1377）は，わずか15歳でイングランド王位を受け継いだ。彼は当然，イングランド王として国内安定および国力増強を考えなければならなかった。このことを

完全に達成させるためには，巨大な軍事力と莫大な資金とが要求される。そこでまずはじめに彼は，スコットランド征圧に乗り出した。この第1政策の征圧は，1333年ハリドン・ヒル（Halidon Hill）の戦いで勝利し成功した。この彼の軍事行動は，スコットランドを支配下に置くことによって，ヨリ多くの租税を徴収しようとしたことに他ならない。また彼は，高度な技術を持つフランドルの織物職人を積極的に，イングランド国内に招き入れようともした。このことは，国内の織物技術を向上させることによって，国内の経済発展を図り，国力増強をねらったものである。

これらのことがイングランドにおいて順調に行われていたならば，何ら問題なく，イングランドの経済が発展し，王室財政が豊かになり，国力が増強されたであろう。

だが，現実にはフランスとの戦争が起こってしまった。それは，フランスの王位継承にエドワード3世がかかわっていたからである。

このフランス王位継承権の問題は，フランス王シャルル4世（Charles Ⅳ, le Bel, 1322－1328）が1328年に没し，カペー王朝（Les Capétiens）が断絶したときから始まった。そしてこの問題は，対フランス戦争，すなわち1337年のカドサンド島（Island of Cadzand）攻撃から，1340年のスロイス戦へと拡大してしまった。

ではなぜ，エドワード3世は，カドサンド島攻撃からスロイス戦へと，軍事力を行使しなければならなかったのであろうか。またスロイス戦において，イングランド王立艦隊がどのように戦い，勝利を導いていったのかが問題となる。この問題を解くカギとして，当然イングランドとフランスとの関係を明確にして置かなければならない。この関係は，非常に複雑で，ややもするとテーマからはずれるかもしれない。

そこで本稿では，イングランドとフランスとの関係をできるだけ明確にした上で，このスロイス戦で，なぜイングランド王立艦隊が勝利を収めることができたのか，またこのスロイス戦を，イングランドの王立海軍史上，あるいは経済史上どのように位置づけなければならないのか，を考察する。

II．フランスとの関係

a）ノルマン王家

1340年のスロイス戦を考察する前に，それまでの複雑な対フランス関係を明確に整理して置く必要がある。1340年のある日突然，スロイス戦が勃発したわけではない。そこでこの対フランス関係を，どこから整理するかが問題となるが，本稿では，フランス王国のノルマンディー（Normandie, Normandy）公ギョーム（Guillaume）が1066年にイングランドを征服し，イングランド王ウィリアム１世（William Ⅰ, the Conqueror, 1066－1087）になり，ノルマン（Norman, Normand：デーン族系のフランス人）王朝を開始したときから始める。

このノルマンディー公ギョームは，フランス王国内の１諸侯にすぎなく，カペー家のフランス王フィリプ１世（Philippe Ⅰ, 1060－1108）の下臣であった。

当時フランス王国は，カペー家の王領をはじめ，ブルゴーニュ（Bourgogne）公，アキテーヌ（Aquitaine）公，ブルターニュ（Bretagne）伯，フランドル（Flandre）伯，アンジュー（Anjou）伯，シャンパーニュ（Champagne）伯，そしてノルマンディー公の公領がそれぞれ存在していた。フランス王国内でのこれらの大諸侯たちは，当然カペー家と主従関係を結んでいるものの，いずれもカペー家の王領よりも大きい領土を所有しており，１種の独立国を形成していた。

ノルマンディー公家は，もともとヴァイキング出身のデーン１族であり，フランス王国に侵入し，そしてフランスの北西部を力ずくで奪い取った民族である。その後のノルマンディー公ギョームが1066年に，今度はイングランドに侵入し，武力にものを言わせて力ずくで，イングランド王になった。

ギョームがイングランドに侵入した直接の原因が，エドワード証誓王（Edward, the Confessor, 1042－1066）がイングランドの継承者として，ギ

ョームと約束していたからといわれているが，真偽のほどは不明である[1)]。だが，このイングランドの侵入に対して1ついえることは，ギョームがノルマン的な野心家の血を受け継いでいるということである。この野心が，イングランド王権への主張と変わり，当然のごとくギョームは，イングランドに侵入し，そしてイングランド王になり，ノルマン王朝を開始させたのである。ギョームの立場から考えると，彼の行動は納得できるし，またそうせざるを得なかったであろう。

もしカペー家がフランス王国内で実質的に強力な王であったならば，ギョームの単独行動を阻止し，カペー王家のフィリプ1世自らがイングランドに侵入し，イングランド王にもなっていたであろう。その理由は，フランス王国内で，パリ周辺のわずかな地域の王領しか持たないカペー家にとって，王領を拡大させることがフィリプ1世の責務であり，また他の巨大な家領を所有する有力な大諸侯を牽制する意味からも必要なことであったから。

1066年にノルマンディー公ギョームがイングランド王ウィリアム1世になり，ノルマン王朝を開始させた時点から，フランス王国内では非常に奇妙な現象が生じた。それは，このウィリアム1世がノルマンディーの封土を受けているフランスでの1諸侯であるとともに，イングランドでは国王であるという現象である。

この時点からイングランドとフランスとは，非常に複雑で長期にわたる覇権抗争の火種を抱え込んでしまった。

イングランド王ウィリアム1世は，封土ノルマンディーを受けている以上，当然フランス王フィリプ1世の下臣である。でもこの下臣は，パリ周辺のわずかな王領しか保有しないカペー家よりも，はるかに大きなノルマンディー公領を保有している。それにまたこのウィリアム1世は，イングランドをも保有している。カペー家においても，またノルマンディー家においても，

注1）Thomas Hodgkin, The History of England, from the Earlist Times to the Norman Conquest, (To 1066), in William Hunt and Reginald L. Poole, eds., *The Political History of England*, Vol. 1, Repr. of 1914, ed., Ams Press, Kraus Reprint Co., 1964, p. 457.

それぞれその領土の１諸侯であり，またそれぞれ中小の貴族・騎士たちを臣従させ，封建社会の頂点に立っている。またこれらの中小の貴族も，それぞれ下級の貴族・騎士たちを臣下としている。封建社会において，領土に差がある以上，当然そこには軍事的な差もある。この軍事的な差は，ノルマンディー公でありイングランドの王でもあるウィリアム１世と，カペー王家フィリプ１世との将来自然に起こるべき衝突の決定的な要因であった。

フランス王国内では，下臣と王との勢力が逆転している。この逆転は，いずれ軍事力でもって是正される。この是正は，ウィリアム１世がノルマン王朝を開始させた時点から始まり，現実に，イングランド王ウィリアム１世 vs. フランス王フィリプ１世という関係式ができあがった。

ここで１つ付記して置かなければならないことがある。それは，上述の関係式が成立する前に，ギョームがただ単に武力にものを言わせて，いとも簡単にイングランドに侵入し，完全に征服できたのであろうか，ということである。多少の軍備を保持していたならば，侵入ぐらいはできるものの，完全な征服まではいかないであろう。史実が物語るように，完全に征服できたのであるから，そこには軍事力以外の何か他の要因があった，と考えなければならない。

もしギョームがただ単に武力だけでイングランドを完全に征服したとしたら，イングランド王になったギョーム，すなわちウィリアム１世は，その時点で兵士の士気を高めるために，またその軍事力を保持し続けるために，イングランドにかなり長い間滞在しておかなければならなかったであろう。現実には，イングランド王になったウィリアム１世は，すぐにノルマンディーに帰ってしまった。

そこで，イングランド王ウィリアム１世がノルマンディーにすぐに帰れた理由は，イングランドにおける軍事力以外の何か他の力があったからだ，と考えなければならない。その何か他の力というのは，教会の力とドームズディ・ブック（Domesday Book）作成による土地への規制力とである。

ギョームがイングランド征服のために実際に戦ったのは，ハロルド２世

(Harold Ⅱ, 1066. 1 −1066. 10) である。このハロルド2世にとっても，ギョームに関して大変ミステリアス事件がある[2]。それは，フランスのバイユー（Bayeux）の寺院に今なお現存しているバイユーつづれ織り（Tapestry of Bayeux）の中にある。このつづれ織りは1大絵巻で，この中で当時イングランドの王立継承権の第1位ハロルドが，エドワード証誓王の次期イングランド王はギョームである，とギョームと約束していることである。

1064年ごろハロルドは，エドワード証誓王の使者としてノルマンディーに渡ることになった。だが，彼はその途中，嵐に遭いポンティユー伯領（Count of Ponthieu）のガイ領（Territory of Guy）に漂着した。人質になったハロルドを助けるためにギョームは，多額の身代金をガイに支払った。またギョームは，ハロルドに対して歓迎の意を表わすために，彼をノルマンディーの騎士爵に叙した[3]。

ハロルドに対するこのようなギョームのもてなしは，何か下心，すなわち野望があったに違いない。その下心はただ1つ，自分がイングランド王になることであった。このことは，ハロルドに対してギョームが自分の娘アデラ（Adela）を嫁がすことを約束したり[4]，またギョームとエドワード証誓王との約束，すなわちイングランドの王位継承権をギョームに譲るという約束を誓わせた[5]，ことからもわかるであろう。

だが結果は，王位継承権第1位のハロルドがイングランド王位を受け継ぎ，ギョームの野望は打ち砕かれてしまった。この結果の経緯は，エドワード証誓王が，ハロルドおよびギョームどちらにも良い顔がしたく，たまたまハロルド側に強く出られたため，自分の意志が変わってしまったという，彼の優柔不断からきたのであろう。

そこでギョームは，エドワード証誓王と約束したイングランドの王位継承権を盾に取り，イングランドに進攻し，ハロルド2世と戦った。結果は，ギ

2）*Ibid.*, p. 468.
3）*Ibid.*, p. 469.
4）*Ibid.*, p. 469.
5）*Ibid.*, p. 469.

ョームの勝利で終わった。このギョームの勝利は，彼の狡猾な作戦からもたらされた。

イングランド王になったハロルド2世は，即位当初から内外の敵に対処しなければならなかった。すなわち対内的には，自分の王位継承に不満を持つ兄トスティーグ（Tostig, Earl of Northum, −1066）の反乱。対外的には，エドワード証誓王と約束したギョームの履行である。現実にハロルド2世は，兄トスティーグの不満が形になったノルウェイ王ハラール3世（Harald Ⅲ, 1015−1066）との合同軍と戦わなければならなかった。この戦いは，ハロルド2世軍を一時的に集結，巨大化させることによって大勝した[6]。だが，この集結によって手薄になったところを，ギョームの軍隊によって攻め入られてしまった。その結果，ハロルド2世は戦死し，10カ月間の在位で終わってしまった。

ハロルド2世の敗北は，彼が全イングランドを掌握していなかったことによる。兄トスティーグとハラール3世との合同軍と戦ったのは，ハロルド2世軍のみであり，全イングランド軍ではなかった。当時ハロルド2世は，名目上のイングランド王であり，諸侯の頂点に立つ王ではなく，ただ単に有力な諸侯のうちの1諸侯にすぎなかった。国王と諸侯との関係は，主従関係が極めて薄く，また封建制度も確立されていなかった。そのためギョームの奇襲攻撃に対しては，ハロルド2世軍しか立ち向かうことができなかった。

1066年に武力でイングランドを征服したギョームは，合法的なイングランド王として，ウェストミンスター・アベイ（Westminster Abbey）で戴冠式を挙げ，イングランド名をウィリアム1世にした。

ウィリアム1世が1066年にイングランドを征服し，そして完全に統一支配できた要因は，当然，軍事力を整備・強化させたことに他ならない。他の要因として考えられるのは，彼が教会の力を巧みにかつ最大限に利用したことと[7]，

6）*Ibid.*, p. 481.

7）George Burton Adams, The History of England, from the Norman Conquest to the Death of John, (1066−1216), in William Hunt and

（次頁脚注へ続く）

ドームズディ・ブックを編纂させること[8]によって農民をヨリ土地に緊縛させたことである。

ウィリアム１世は，イングランドへの侵攻をヨリ正当化させるために，すでにローマ教皇の認可を取り付けていた。すなわち彼が認可を得られた理由は，ハロルド２世がギョーム時代のウィリアム１世との誓約を破ったこと[9]と，彼がイングランド王になったとき，イングランド教会を改革するという約束をローマ教皇にしたこと[10]とである。さらに彼は，イングランドをヨリ能率的に支配・統一させるために，教会を統制下に置くとともに，イングランドの土地台帳であるドームズディ・ブックの編纂にも力を入れた[11]。このドームズディ・ブックの編纂により，土地所有の実態がヨリ明確になり，租税および戦費を諸侯から，ヨリ組織的にかつヨリ厳格に徴収することができた。

このようなヨリ明確な財政的裏付けを基にしてウィリアム１世は，封建制度を確立させ[12]，イングランドをヨリ組織的に統一支配することができた。

b）アンジュー王家

ウィリアム１世治世当時のイングランドの立場は，ノルマンディー公領の１部にすぎなく，政治，軍事，文化のすべてを，ノルマンディーに依存していた。いいかえると，征服されたイングランドは，ノルマンディー公領の文化圏の１部にすぎなかった。フランス王国内のノルマンディー公家がしだいに領土を拡大していくということは，フランス王家のカペー家への脅威を一

Reginald L. Poole, eds., *The Political History of England*, Vol. 2, Repr. of 1905, ed., Ams Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 49.

8）*Ibid.*, pp. 66－67.

9）Stenton, F. M. Anglo-Saxon England, c. 550－1087, in Sir George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 2, Third Edition, Repr. of 1943, ed., Oxford University Press, 1975, p. 622.

10）*Ibid.*, p. 658.

11）*Ibid.*, p. 617.

12）*Ibid.*, p. 681.

層高めていくということを意味している。

このカペー家への脅威をヨリ増幅させたのが，アンジュー王家のヘンリー2世（Henry Ⅱ, Curtmantle, 1154－1189）治世のときである。すなわちヘンリー2世は，1149年に母マティルダ（Matild, daughter of Henry Ⅰ, 1102－1167）からイングランド王領およびノルマンディー公領を譲渡され，また2年後の父ジョアフリー（Geoffroi, Earl of Anjou, 1113－1151）の死によって，アンジュー，メーヌ（Maine），トゥレーヌ（Touraine）の各領土を継承し，さらに1152年に，フランス王ルイ7世（Louis Ⅶ, 1137－1108）と離婚したエリナ（Eleanor of Aquitaine, 1124－1204）との結婚によって[13]，アキテーヌ，ポアトゥー（Poitou），トゥールーズ（Toulouse），ガスコーニュ（Gascogne）の各領土をも加える膨大な領土を支配する王になっていたのである。

カペー王家にとっては，アンジュー家[14]のイングランド王位継承，すなわちヘンリー2世の存在は，もはや自力ではどうしようもない状態に陥っていた。というのは，この時点で領土的にカペー王家に臣従しているフランス内の公領を加えても，アンジュー家の方が手の付けられないほど圧倒的に大きくなっていたからである。カペー王家は，アンジュー王家の脅威にさらされ

---

13) Poole, A. L., From Domesday Book to Magna Carta, in George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 3, Second Edition, Repr. of 1951, ed., Oxford University Press, 1975, pp. 162－163.

14) このアンジュー家は，ウィリアム1世を開祖としてノルマン王家がスティーヴン王（Stephen of Blois, 1135－1154）の時代で終わり，その後，新しく始まった王家である。新しく始まった王家といっても，ノルマン王家の血統が絶え，急に全く別のアンジュー王家が始まったというのではない。イングランド王家（現代のイギリス王家も）においては，その各王家の名称はすべて男性の系統家名が採用されているため，ヘンリー2世以降の王家名も，アンジュー伯ジョアフリーの呼び名を採って，アンジュー王家と呼ばれるようになった。またこのアンジュー王家は，プランタジニット（Plantagenets）王家とも呼ばれる。その理由は，ジョアフリーがこのんでえにしだ（ラテン語 planta genista）の小枝を帽子にはさんでいたからである。このプランタジニット王家という言葉はエドワード4世（Edward Ⅳ, 1461－1470 and 1471－1483）の父ヨーク公リチャード（Richard, Duke of York, 1441－1460）が1448年に，はじめて使用した。

ながらも，カペー王家を臣従しているフランス内の公家と友好状態を保ちながらも，フランス王国を存続させていかなければならなかった。

一方，アンジュー王家にとっては，ヨーッロッパ大陸を征服するということが最大の野望であり，イングランド征服はその1手段にすぎなかった。そのことの例として，ヘンリー2世が，イングランド政府の中枢機関すべてにフランス人で押し通したり，また彼がイングランドの言葉に全く関心を示さなく理解していなかった，ことからもわかるであろう。

ヘンリー2世は，野望をヨリ現実的なものにするために，フランス王への臣従の拒否，すなわち大陸におけるイングランドの所領を，フランスの支配から解放させなければならなかった。だが，彼の野望は，広大な領土をめぐる4人の息子たち，ヘンリー（Henry, the Young King），リチャード（Richard Ⅰ, the Lion Hearted, or Cœur de Lion, 1189－1199），ジョアフリー（Geoffrey, son of Henry Ⅱ），ジョンの抗争に巻き込まれて実現できなかった。また，その領土をめぐる抗争にフランス王フィリプ2世（Pilippe Ⅱ, Philippe Auguste, 1180－1223）が1枚加わり，ヘンリー2世の治世を足もとから揺るがしていった。

フランス王国内で半分以上の所領を持ち，またイングランド王でもあるヘンリー2世は，自分の所領をヨリ能率的に支配しようと思い，財産分与を行った。まず初めに長男のヘンリーには，フランスの慣習に従い，王位そしてノルマンディー，アンジュー，メーヌの各領地を，二男のリチャードにはアキテーヌの領地を与えた。三男のジョアフリーには，ブルターニュ公の女子相続人と結婚させ，領地を確保させた[15]。四男のジョンには，全く領地が与えられなかった。ジョンへの所領分与になったとき，所領に対するヘンリー2世の意図が全く逆の方向に進み，広大な所領をめぐる兄弟同士の争いが起こってしまった。このためジョンに対する大陸での所領分与が不可能となっ

15) W. P. Hall, R. G. Albion and J. B. Pope, eds., *A History of England and the Empire-Commonwealth*, Repr. of 1971, ed., Robert E. Krieger Publishing Company, Inc., 1984, p. 81.

たヘンリー2世は，ジョンのために，1171年ローマ教皇の認可を得て，アイルランド征服を行った[16]。

兄弟同士の争い，すなわちジョンよりも10歳以上の成人した長男ヘンリーと，二男のリチャードとが所領について，非常に野心的な執着心を持っていた。この執着心は，長男ヘンリーが二男のリチャードのアキテーヌ支配に対して不満を持ち，抗争が生じたことからもわかる。

自分に反抗的な長男ヘンリーが1183年に死に，また三男のブルターニュ公ジョアフリーが1186年に亡くなったとき，ヘンリー2世はどうしても四男のジョンに，大陸での所領分与がしたかった。具体的には，二男リチャードが保有しているアキテーヌの公領である。1189年ヘンリー2世は，この旨を二男リチャードに打診してみた。結果は，武力でもって猛反対された。その結果，ヘンリー2世は四男ジョンに対して，ただ単に“欠地王”という名を与えただけに終わってしまった[17]。当時リチャードは，1183年長男ヘンリーが亡くなった以後，父ヘンリー2世存命中に戴冠が許されなかったことを根に持ち，フランス王フィリプ2世と同盟を結んでいた。

またヘンリー2世は，大陸での所領が得られなかった四男ジョンを，結果的に二男リチャードおよびフランス側に追い遣り，彼らとの抗争を引き起こしてしまった。

フィリプ2世にとっては，このようなイングランド王国の内紛は願ってもないことであり，ましてイングランド王の息子2人がフランス側についてくれるということは，これ以上好ましい状況はなかった。この抗争の結果，ヘンリー2世は，フランス側に有利な和約を強制された。この抗争および強制的な和約によって，彼は心身ともに疲れ，1189年に亡くなった。

もしヘンリー2世が，息子たちやまた有力な諸侯に対して，絶大なる実権を持っていたならば，四男ジョンに領土分与ができ，このような結果には終わらなかったであろう。

---

16) Adams, G. B., *op. cit.*, p. 298.
17) *Ibid.*, p. 303.

四男ジョンへのアキテーヌ所領の分与ということで1188年にフランス王フィリプ2世に臣従の誓いを立て，そして父ヘンリー2世と戦ったリチャード1世は，1189年に父が亡くなるとイングランド国王に即いた。彼は国王になる前にすでにフランス国王と同盟を結んでいたため，王国後の最初の対フランス関係を好ましい状況下に置いていた。だが，この友好関係は，その後彼が母エリナに唆され参加した十字軍遠征のときに断たれてしまった。

この十字軍の目的は，パレスティナの「聖地」を回教徒から奪回することであった。具体的には，パレスティナの「聖地」を巡礼するキリスト教徒に，安全を与えるためであった。この目的の実現のために，同じ「キリスト教国」の1員として共感しているフィリプ2世も十字軍遠征に参加した。また神聖ローマ皇帝フリードリッヒ1世（Friedrich I, Barbarosa, 1152－1190）も同様であった。

このことだけだったらイングランドとフランスとの関係は，友好的なままで終わっていたであろう。この友好的な関係に亀裂を入れたのは，第3次十字軍遠征時でのリチャード1世の行動である。具体的には，フィリプ2世の妹アデラ（Adela）との婚約を破棄し，ナヴァラ王の娘ベレンガリア（Berengaria）と結婚したこと[18]。また彼の下臣がメシーナの町で略奪の限りを尽くしたこと。さらにシチリア王位継承問題において，ノルマン家の血を引くタンクレット（Tancred）王から，シチリアを支援するという条件で，巨額な金銭を受け取っていたことである[19]。

第3次十字軍遠征の結果，イングランド王リチャード1世とフランス王フィリプ2世との関係は，非常に険悪なムードになっていた。このことは，リチャード1世が海難で捕われ，そして1193年に神聖ローマ皇帝ハインリッヒ

---

18) *Ibid.*, p. 366.　フィリプ2世は，リチャード1世が自分の妹と婚約していたので，ナヴァラ王の娘ベレンガリアとの結婚に猛反対した。だがリチャード1世は，フィリプ2世の警告を無視してベレンガリアと結婚した。第3次十字軍遠征時でのこのリチャード1世の行動に対して，フィリプ2世は，もはやリチャード1世を信用できないものとして友好の念を断った。

19) *Ibid.*, pp. 366－367.

6世（Heinrich VI, 1190－1197）から釈放されるときに物語れる。

第3次十字軍遠征中リチャード1世は，イングランドでの国王代理としての弟ジョンの国政ぶりに目に余るものがあり，急遽イエルサレム南西のアスケロンから帰らなければならなくなった。その途中彼は，ヴェネツィアの沖合いで嵐に遭いトリエステ（Trieste）まで流された。海難に遭遇した彼は，オーストリア公のレオポルド5世（Leopold V, 1177－1194）に捕われデュルレンシュタイン城に幽閉された。そして彼は，身代金150,000マルクを皇帝ハインリッヒ6世に支払うという条件で釈放されることになった。この釈放を知ったフィリプ2世は，彼の弟ジョンに“気をつけなさい悪魔が釈放された”[20]と知らせた。

フィリプ2世は，以前に友好関係を結んでいたリチャード1世を，今では彼の傍若無人に腹を立て，悪魔と呼んでいる。このことからしても，リチャード1世とフィリプ2世との亀裂は，もう手の施しようのないほど進んでいた。釈放されたリチャード1世は，ロンドンに帰り，内外の問題を解決した後，フランスに渡った。そのフランスで彼は，フィリプ2世によって侵害された領土を奪回するのではなくて，極度の財政逼迫のため，フィリプ2世の攻撃に対し防戦一方であった。

ジョンは，父ヘンリー2世から，かねてから婚約を決められていたグロースター伯ウィリアムの娘，また女子相続人でもあるイザベル（Isabel of Gloucester）と1189年に結婚した[21]。だがジョンは，1199年にイングランド王になり，そして彼女との結婚が「近親」，すなわちイザベルの祖父ロバートがヘンリー1世の庶子であるという理由で，1200年に彼女と離婚した[22]。そしてジョン王は，同じ年の1200年にラ・マルシュ伯ルジナンのヒュー・ザ・ブラウン（Hugh the Brown of Lusignan）と婚約していた14歳のアングレーム泊エイマー（Aymer, Count of Angoulême）の娘イザベル（Isabel of

20) *Ibid.*, p. 375.
21) *Ibid.*, p. 361.
22) *Ibid.*, p. 397.

Angoulême）と再婚した[23]。

ジョン王のこの再婚は，政略結婚である。アングレーム伯の娘と結婚するということは，当然アングレーム伯とジョン王との関係が友好状態にあり，フランス勢力を抑えるということになる。というのは，このアングレーム伯領にジョンの勢力が及ぶということは，フランス人が南北に分断され，軍事力が多少とも減少されるということを意味しているからである。

だが，ジョン王が意図している政略結婚は，失敗に終わった。14歳のアングレーム伯の娘イザベルと略奪再婚したのはしたが，一向にフランスの勢力を抑えることができなかった[24]。それどころかジョン王は，イザベルと婚約していたヒュー・ザ・ブラウンに告訴されてしまった。告訴を受理したフィリプ2世は，封建宗主として，ジョン王を裁判にかけるために，1202年パリに出頭するよう命じた。

この出頭をジョン王が拒否したために，フランス内の彼の所領は，すべて没収を宣言された。当時カペー家にとっての最大の仕事は，アンジュー家と抗争して，アンジュー家に奪われたフランスの所領を奪回することにあった。

フィリプ2世は，略奪結婚によるヒュー・ザ・ブラウンの告訴により，法的にジョン王の所領を攻撃する大義名分ができた。また彼は，味方につけていたヘンリー2世の二男ブルターニュ公のジョアフリーの息子アーサー（Arthur of Britanny）が，ジョン王に殺された[25]ことによって，ジョン王の支持者たちを非支持者に変えた。このことによって彼は，フランス内の大半の貴族を味方につけ[26]，軍事力を拡大させることができた。抗争の結果は，

23）Poole, A. L., *op. cit.*, p. 380.

24）この当時のフランス軍は，軍事力をかなりのスピードで増強していた。Hume, D., *The History of England, from the Invasion of Julius Caesar to the Revolution in 1688*, William Allason, 1818, p. 198.

25）Adams, G. B., *op. cit.*, p. 401.

26）このアーサーは，リチャード1世の息子であり，彼の後の王位継承者として約束されていた。ジョン王は，このアーサーを，王位継承としての禍根を残さないために，殺してしまった。このことによって彼は，少なくとも，有力な貴族を非支持者に回してしまった。Adams, G. B. *op. cit.*, p. 370.

当然のごとくフィリプ2世が大勝し，アンジュー家に奪われていたフランスの所領の大部分を奪回させることができた。奪回した主要な所領は，ノルマンディー，ポアトゥーである。だがジョン王は，これらの所領が奪われたとしても，これらの所領に対する所有権を放棄したわけではなかった。

なぜジョン王は，甥のアーサーを殺害しなければならなかったのであろうか。それは，ひとことて言えば，イングランドの王位継承をスムーズに行うためであった。ジョン王の兄リチャード1世は，十字軍遠征に行く前に，自分の後の王位継承者に甥のアーサーを指名していた。そのリチャード1世が第3次十字軍遠征後に，イングランドの王位継承者をジョンに変更した。この変更した理由は，フィリプ2世との仲が悪くなったことにほかならない。もし変更なしに，ブルターニュ公ジョアフリーの長男アーサーがイングランド王位を継承していたならば，フィリプ2世は，フランス王国内での封建宗主としての宗主権をヨリ強め，イングランドの軍事力に歯止めをきかし，西ヨーロッパ最強の王になっていたであろう。

だが，野心的なリチャード1世にとっては，このような事柄は予期できることであり，またイングランド王の責務として，そうならしめてはいけないことであった。そこでリチャード1世が，フィリプ2世と仲たがいした後，即，イングランドの王位継承権をジョンに変更したことは，納得できる行動である。

イングランドの王位継承順位を巡る紛争の火種を少しでもなくすため，またフランスの軍事力を巨大化させないためにも，ジョン王は，甥のアーサーを殺害した。ジョン王にとって，自己の地位を確保するために，また安定させるためにも，彼のとった行動は当然の結果であったろう。だが彼は，フィリプ2世との関係を最悪な状態に陥らせた。

1203年のフィリプ2世との抗争において，フランス所領の大部分を失い，アキテーヌ領とガスコーニュ領だけになったジョン王は，イングランドに撤退しなければならなくなった。このジョン王のイングランドへの撤退において，フランス所領内の多くの貴族たちは，自己の活動の場所を今までどおり

フランスに置くのか，あるいはイングランドに置くのか選択を余儀なくさせられた。いいかえると，多くの貴族たちは，今までどおりフランスの所領内において，イングランドの土地や地位を持つことができなくなったのである。つまり貴族たちは，フランスに留まるならばフランスの封建宗主であるフィリプ2世の傘下に入るか，あるいは完全にイングランドに移り住み，イングランド王ジョンに仕えるのかのどちらかを選択しなければならなくなったのである。

この撤退によってジョン王は，イングランド王としての生活基盤をイングランドに置くようになった。そしてイングランドは，もはやノルマン領の1部としての色釈が完全になくなり，本来の意味での王国になった。

1203年にイングランドに撤退したジョンは，イングランドの政治，経済，文化の中心を担っていたノルマン領を，1204年に完全に失った。このことによってイングランドとフランスとの関係は，完全に決裂してしまい，修復の余地を全く残さなくなっていた。この領土の喪失とともにジョン王は，自分にとって，イングランド王を継続する上で最も重要な人物2人を失った。つまり，ジョン王の大目付役であるキャンタベリー大司教ヒューバート・ウォルター（Hubert Walter）が1205年7月13日に，また国政の知恵袋である最高司法長官ジョアフリー・フィッツピーター（Geoffrey FitzPeter, Earl of Essex）が1213年10月14日に亡くなった。これらの損失は，ジョン王自身にとって，またイングランド経済史にとっても転換期であった。

このウォルター大司教は，彼が亡くなったとき，ジョン王が「今から初めてイングランド王になれる」[27]ともらしたほど，国政に多大な影響を与えていた。またフィッツピーター最高司法長官は，ジョン王が不在のとき，つまり遠征に行っている間，ジョン王の代理人[28]として活躍していた。

ノルマン領の喪失，そして国政をつかさどる上で無くてはならない2人の人物の死。この2つの要因によってジョン王は，国政方針を転換せざるを得

27）*Ibid.*, p. 407.
28）*Ibid.*, p. 428.

なくなった。この国政方針の転換をヨリ決定づけたのは，ジョン王と教皇インノケンティウス3世（Innocentius Ⅲ, 1198－1216）との衝突である。すなわち，キャンタベリー大司教ウォルターの死によって，その後任を巡って衝突が起きてしまった。ジョン王は，後任に親密で頼りになる助言者ノーリッチの司教ジョン・ドゥ・グレイ（John de Grey, －1214）を推挙した[29]。またキャンタベリーの僧侶たちは，国王ジョンの許可なしに詩人でキャンタベリー修道院次長レジナルド（Reginald）を推薦した[30]。教皇インノケンティウス3世は，これらの候補のうちどちらかを選ぶことなく，2人とも拒否した[31]。そして教皇インノケンティウス3世は，1207年7月17日に，宗教心が厚くまた自ら信頼を置いている枢機卿スティーヴン・ラントン（Stephen Langton, －1228）を，キャンタベリー大司教に決定した[32]。

ジョン王は，キャンタベリー大司教の後任を巡る教皇インノケンティウス3世の独断的で強引なこの決定を，全く無分別に反対した[33]。この反対によってジョン王のイングランドは，教皇インノケンティウス3世から聖職停止を受け，そして翌年の1209年10月には，ジョン王自らが破門に処せられた[34]。さらに悪いことにジョン王は，1212年にイングランド王位の剥奪処分を受けた[35]。この聖職停止において最も被害を受けたのは，イングランド国民であった。というのは，具体的に「教会が閉鎖され，教会の鐘が打たれなくなり，ミサが教会の中庭で行われ，結婚が教会のポーチで行われ，死者が町の外に連れ出され，教会の祈りや司祭やセレモニーなしに，道路端の溝に葬られた」[36]というようになってしまったからである。

29) Poole, A. L., *op. cit.*, p. 444.
30) *Ibid.*, p. 444.
31) Robinson, C. E., *England : A History of British Progress from Early Ages to the Present Day*, Second Edition, Thomas Y. Cromwell Company, 1928, p. 92.
32) Poole, A. L., *op. cit.*, p. 445.
33) Robinson, C. E., *op. cit.*, p. 92.
34) Poole, A. L., *op. cit.*, pp. 445－446.
35) *Ibid.*, p. 422.
36) Robinson, C. E., *op. cit.*, p. 93.

イングランドのこのような状況下にあっても，以前としてジョン王は，教皇インノケンティウス3世の権力に屈伏することなく，改悛しなかった[37]。そこでイングランド国民は，ジョン王に対する反発感情をしだいに強めていった。というのは，社会生活がしだいに悪化の一途をたどり出し，またジョン王が戦費の財源確保のため，強制的に賦役免除金および封土賦課金を法外に高くしたからである。この戦費とは，当然フランスでの旧領土を回復させるためのものであり，今までどおりの賦役免除金や封土賦課金ではとうてい足りなく，軍事力増強のため独断的にジョン王が，新査定で法外に高くさせたものである[38]。

専制的な暴君ジョン王に対するイングランド諸侯の反感は，社会生活の悪化とともに，しだいに巨大な勢力となり，もはや彼が無視できない圧力団体となっていった。この反感をうまく利用して，イングランドの領土を掌握しようとしたのがフィリプ2世である。彼は，ジョン王が改悛しないということを盾に取り，教皇インノケンティウス3世からイングランド進攻の許可を得た[39]。

イングランド王位の剥奪，諸侯たちの反感，そしてフランス軍の進攻によって，ついに1213年ジョン王は，教皇インノケンティウス3世に屈伏し，彼が推挙する枢機卿スティーヴン・ラントンをキャンタベリー大司教に認めた[40]。またこのときジョン王は，ローマ教皇に従属する臣従の誓いを強制させられ，イングランドとアイルランドをローマ教皇の封土として，年間1,000（イングランド700＋アイルランド300）マルクの支払を余儀なくさせられた[41]。

教皇インノケンティウス3世に対するジョン王のこれらの譲歩により，教皇とジョン王との関係が正常化され，イングランドは法的にフランスから進

37) *Ibid.*, p. 93.
38) Adams, G. B., *op. cit.*, p. 419.
39) *Ibid.*, p. 422.
40) *Ibid.*, p. 422.
41) Poole, A. L., *op. cit.*, p. 457.

攻されなくなった。だが，フィリプ2世は，長男ルイ（後のルイ8世：Louis Ⅷ, 1223－1226）に命じて，進攻を強行させた。この進攻に対してジョン王は，義兄弟のソールズベリー伯ウィリアム・ロングスワード（William Longsword, Earl of Salisbury）の助けを得た。ロングスワードは，フランス艦船400隻をも拿捕あるいは破壊し[42]，フランス軍のイングランドへの進攻を食い止めた。このことによりジョン王は，対外的な脅威から開放されることになった。

このことがきっかけでジョン王は，逆にローマ教皇の庇護のもと，フランスに進攻しようと決意し，ドイツ皇帝オットー4世（Otto Ⅳ, von Braunschweig, 1198－1218）およびフランドル伯フェルディナント（Ferdinand, Count of Flanders）と同盟を結んだ[43]。オットー4世は，ジョン王の甥であり，また王位継承でフィリプ2世の支持が得られなく，彼に対して不満を持っていた。フランドル伯のフェルディナントは，自分の領土にフェリペ2世が侵略して来たことに対し腹を立てていた[44]。このような理由で，彼らはジョン王の呼びかけに対し，即，同盟軍を結成させた。

彼らは，ソールズベリー伯ウィリアム・ロングスワードのもとに集結し，連合軍でもって，1214年にフランスに進攻していった。この進攻で衝突した場所は，フランドルのブーヴィーヌ（Bouvines）である。

1214年のブーヴィーヌの戦闘で，イングランド諸侯たちがほとんど出征を拒否したため，フィリプ2世の勝利と終わってしまった。このときのイングランド人の出征拒否には，2つの理由がある。その1つは，ジョン王とローマ教皇との抗争で，イングランドの諸侯たちがジョン王を信頼しなくなったこと。その2つ目は，戦費確保のためジョン王が，賦役免除金と封土賦課金とを独断的に法外に高くしたことである。これら2つの要因において，イングランド諸侯たちが対フランス戦争の出征を拒否したことは納得できる。

42) Adams, G. B., *op. cit.*, p. 426.
43) *Ibid.*, p. 431.
44) Oman, Sir C., *A History of the Art of War in the Middle Age*, Vol. 1: 378－1278 AD, Repr. of 1924, ed., Greenhill Books, 1991, p. 468.

イングランド諸侯たちの出征拒否は，ただ単にこれだけにとどまらなかった。つまり専制的な暴君ジョン王に対する彼らの不満がついに，キャンタベリー大司教スティーヴン・ラントンを味方につけ，自分たちの特権を回復させるための“マグナ・カルタ（Magna Carta）”を承認させた[45]。

この“マグナ・カルタ”は，1215年6月15日ダンモウ卿ロバート・フィッツウォルター（Robert FitzWalter, Lord Dummow）がジョン王に対し，独裁的な政治をやめさせるとともに，ヘンリー1世が戴冠時に認めた封建貴族の権利を再確認させた憲法であった[46]。

だが，この“マグナ・カルタ”は，国王，貴族，教会，国民それぞれ身勝手な要求事項を盛り込んでいたため，しだいに4者のコンセンサスが得られなくなり，険悪なムードが漂う憲法になっていった。この事態に憂慮した教皇インノケンティウス3世は，自分の王権侵害は無視して，この“マグナ・カルタ”は王権を傷つけるものとして，わずか2カ月で廃棄を宣した[47]。このことにより，諸侯たちの不満が爆発し，反乱が各地で起こった。この反乱に援軍を差し出していたのが，フランス王ルイ8世であった。そして彼は，1216年にロンドンとウィンチェスターとを占領した[48]。

この“マグナ・カルタ”が復活したのは，ジョン王の息子ヘンリー3世（Henry Ⅲ, 1216－1272）の治世のときである。ヘンリー3世は，父ジョン王が陣没した1216年に，イングランド王に即いた。その1216年というときは，ヘンリーがわずか3歳のときであり，国政をつかさどるには，あまりにも若すぎたときであった。そこで，アンジュー王家最大の忠臣であるペンブルク伯ウィリアム・マーシャル（William Marshall, 2nd Earl of Pembroke and Strigul, c. 1136－1219）によって守られ，無事戴冠を終えることができた[49]。

45) Poole, A. L., *op. cit.*, p. 473.
46) *Ibid.*, pp. 470－471.
47) *Ibid.*, p. 479.
48) Adams, G. B., *op. cit.*, pp. 444－445.
49) Tout, T. F., The History of England, from the Accession Henry Ⅲ. to the Death of Edward Ⅲ., (1216－1377), in William Hunt and Reginald L.

（次頁脚注へ続く）

そしてその後，ウィリアム・マーシャルは，ヘンリー3世を擁護するために，自ら1216年10月に王の代理格であるジャスティシャー（Justiciar）の筆頭になり，そしてその2週間後に，大評議会で摂政に就いた[50]。そこで彼は，幼王の補佐役として，国政統制者に教皇大使のグアロ（Gualo），ヘンリー3世の人格形成者にウィンチェスター司教ピーター・デ・ロシェ（Peter des Roches，－1238），ジャスティシャーにヒューバート・ドゥ・バラ（Hubert de Burgh，－1243）を当てた[51]。

摂政に就いたウィリアム・マーシャルは，まずはじめに占領下にあるロンドンをフランスから解放させなければならなかった。そこで彼は，ロンドンでのフランス軍排斥のため，先に廃棄された“マグナ・カルタ”の復活を考えた。この復活のためには，当然に国王，貴族，教会，国民の4者のコンセンサスが得られなければならない。このことの実現のために，国王が貴族に譲歩するという条件で，摂政ウィリアム・マーシャルが貴族に歩み寄っていった。貴族にとってこの歩み寄りは，ヘンリー1世当時の自由な権利が認められるとして大歓迎であった。この両者のコンセンサスによって，ロンドンからフランス軍を追い出す国内的意思統一ができた。

また摂政ウィリアム・マーシャルは，ロンドンからのフランス軍の排斥をヨリ確実なものにさせるために，国外的要因として，教皇大使グアロを通じローマ教皇の力を利用しようとした。

これら2つの要因は，いずれも功を奏し，ルイ8世の決断を迫るようになっていった。すなわちこれら2つの要因は，1217年7月11日のランベス条約（Treaty of Lambeth）にまでこぎつけ，ロンドンからフランス軍を撤退させるようになった[52]。このランベス条約は，平和条約，いいかえればただ単なる休戦条約であったので，いつ抗争が再燃するかわからない条約であった。

Poole, eds., *The Political History of England*, Vol. 3, Repr. of 1905, ed., Ams Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 3.

50) *Ibid.*, p. 4 and Robinson, C. E., *op. cit*, p. 96.

51) Tout, T. F., *op. cit.*, pp. 4－5.

52) *Ibid.*, p. 12.

また“マグナ・カルタ”が1223年に復活し，イングランドでは平和維持の努力がなされていた。

1227年ヘンリー3世は，20歳になり親政に乗り出した。そして彼は，失っていたフランス内の所領の回復に，全精力を傾けだした。このことは，1229年，大陸に戦士を運ぶ軍艦が不十分であったことを知ったヘンリー3世が，ジャスティシャーに対して激怒した[53]ことからもわかるであろう。

ヘンリー3世の失地回復に対する熱意は，非常に強かった。だが，それとは逆に彼は，国内問題をおろそかにしていたため，対フランス用の軍用艦を増強させることができていなかった。ただ単に目先の現象だけに囚われて，現在イングランド王として何をしなければならないのかを冷静に考えたら，フランスの失地回復前に，イングランドの軍事力を整備，増強しなければならなかったのではなかろうか。イングランドの艦戦をも含めた軍事力を増強しない限り，フランスの失地回復はありえない。この点でヘンリー3世は，政治および外交能力に欠けていたといわざるを得ないであろう。

ヘンリー3世は，自分の政治および外交能力を棚に上げ，ただ単にフランス遠征への軍用艦が不足していたという理由から，当時摂政に就いていたヒューバート・ドゥ・バラと非常に険悪な関係に陥っていた。そしてこの関係からイングランド国内が混乱し，ヘンリー3世は，もはや国内を統一させることができなくなっていた。

このような状況下にあってもヘンリー3世は，フランスでの失地回復に希望が捨てきれず，ついに1242年に再び遠征隊を大陸に送った。だが，この1242年の戦いも軍事力不備から，イングランド軍が敗北した。すなわち，1242年のタイユブール（Taillebourg）とサント（Saintes）との敗戦である[54]。この敗戦によりヘンリー3世は，ポアトゥーに対する領土保有権を放棄せざるを得なくなった。実際には，1259年のパリ条約（Treaty of Paris）で，ヘンリー3世は，ノルマンディー，メーヌ，ツゥーレーヌ，ポアトゥー

53) *Ibid.*, p. 34.
54) *Ibid.*, pp. 46－47.

におけるすべての所有権の主張を放棄させられた[55]。

この1259年のパリ条約の締結に立ち合ったのは，当然フランス王ルイ９世（Louis IX, Saint Louis, 1226－1270）である。彼は，ヘンリー３世に上述の領土保有権の主張を放棄させた代わりに，このパリ条約で以下の領土の保有を約束した。すなわち，アキテーヌ（ラテン名アキニタ，俗称ギエンヌ）の領有[56]，およびカペー家が直接に封あるいは領土として所有しているリモージュ（Limoges），カオール（Cahors），ペリギュ（Périgueux）の司教管区の保有[57]を約束した。またルイ９世は，ヘンリー３世に対し，自分の弟アルフォンス・ドゥ・ポアティエ（Alphonse de Poitiers, 1220－1271）が子供なくて死したとき，アジュネ（Agenais）およびサントンジュ（Saintonge）の保有をも約束した[58]。

ルイ９世が強引にパリ条約をヘンリー３世に認めさせることができたのは，ルイ９世が領土拡大の一環として，地中海，大西洋，イングランド海峡に軍港を開設させることによって，フランスの海上権を強化していたからである。

この1259年のパリ条約でイングランドとフランスとの関係は，1204年以来続いていた決裂状態から一応脱出し，修復したように思える。だが，このパリ条約は，ヘンリー３世にとって４つの問題をはらんでいた。すなわち１つは，ヘンリー３世が認められた所有権の範囲が明確でなかったこと。２つ目は，アキテーヌ公領を認められることによって，ルイ９世をイングランドの宗主としなければならなくなったこと。３つ目は，カペー家が封および封土として所有しているリモージュなどの司教管区を与えられたことによって，ルイ９世を頂点とするフランスの封建的管轄権の中に組み込まれたこと。４つ目は，1202年以来フランス王への下臣としての結び付きを無視し続けていたが，この条約によって“臣従の礼”を尽くさなければならなくなったこ

55) Moreton Macdonald, J. R., *A History of France*, Vol. 1, Repr. of 1915, ed., Ams Press, 1971, p. 172.
56) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 105.
57) *Ibid.*, p. 105.
58) *Ibid.*, p. 105.

とである。

これら4つの問題のうち，ヘンリー3世が1番承服しかねたことは，“臣従の礼”を尽くすということであった。すなわちフランス王への“臣従の礼”をヨリ明確にするという条件で，アキテーヌ公領を認められることになったが，このことはヘンリー3世にとって，非常に屈辱的なことであった。またこの“臣従の礼”を尽くすということは，ヘンリー3世の大陸への野望が断たれたということを意味しているように思える。

だが，ヘンリー3世は，1259年のパリ条約以前に，すでにこのアキテーヌを足掛かりとして大陸への野望を考えており，この条約によって野望が断たれたということはなかった。ヘンリー3世が息子エドワード（後の Edward I, Longshanks, 1272－1307）を，1254年にカスティル＝レオン王フェルディナンド3世の娘エリナー（Eleanor of Castile, －1290）と結婚させた[59]。この結婚は，アキテーヌ領におけるフランスからの脅威を，カスティル＝レオン王国の軍事力によって排除させようとする政略結婚であった。いいかえると，ヘンリー3世は，カスティル＝レオン王国と軍事的同盟を結ぶことによって，大陸への野望を考えていた。逆にルイ9世は，上述の政略結婚が成立したことによって，カスティル＝レオン王国の軍事的脅威のもと，アキテーヌを支配することができなくなった。そこで彼は，仕方なくアキテーヌの所有権を，ヘンリー3世に認めざるを得なかった。

1272年にイングランド王位を継承したエドワード1世は，大陸への野望という考え方を捨て，大陸におけるアキテーヌの安定，すなわちフランスとの関係修復に全力を注いだ。

だが，エドワード1世の努力は，功を奏さなかった。というのは，1259年のパリ条約の中にはらんでいた問題が，しだいに表面化してきたからである。すなわち，1259年に認められたイングランド王の支配権の範囲が明確ではなく，領土と裁判権に関して，しだいに衝突が生じてきた。また1294年，フランス王フィリプ4世（Philippe IV, le Bel, 1285－1314）が大宗主として，ガ

59) *Ibid.*, p. 73.

スコーニュへの干渉を増大させ，そして占領し始めた[60]。これらのことによって，1297年からイングランドとフランスとが交戦状態に入ってしまった[61]。

この時点で，1259年のパリ条約が締結時に意図していた目的とは，異なった目的で運用されるようになっていた。1259年のパリ条約の意図は，イングランドとフランスとの友好関係をつくることにあったが，この1294年のフランス軍の侵攻によって，もはやこの条約は，意を解しなくなった。1294年の戦争のもともとの原因は，商業上の利益を巡り，1293年5月15日ブルターニュから出航したノルマン船舶を，フランス艦船が撃沈させたことによる[62]。この商業上の利益とは，多大な利益が得られるガスコーニュ産のワイン貿易であった。そこでフィリプ4世は，当時自国との国境が曖昧だったアキテーヌおよびガスコーニュを干渉し，占領し始めた。

エドワード1世は，このアキテーヌおよびガスコーニュを死守するために，1295年議会を開催させヨリ多くの軍事費を捻出させようとした。軍事費捻出のためのこの1295年の議会を“模範議会”[63]という。この軍事費でもっとエドワード1世は，イングランド商船隊の組織を確立させた[64]。彼が商船隊を組織させた理由は，1217年にサウス・フロランド戦（Battle of the South Foreland）でフランスから捕虜にした騎士ターバービル（Sir Thomas de Turberville）の発言による。ターバービルの発言は，フィリプ4世がすでに大商船と大規模な軍隊とを装備したフランス商船隊を組織していたということである[65]。この当時フランスは，スコットランドと同盟を結び，そして

---

60) *Ibid.*, p. 187.
61) *Ibid.*, p. 188.
62) Powicke, Sir M., The Thirteenth Century, 1216－1307, in Sir George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 4, Second Edition, Repr. of 1962, ed., Oxford University Press, 1992, p. 644.
63) この1295年の“模範議会”は，対フランス戦争のための軍事費捻出を行った議会であるが，またそこでは，ウェールズおよびスコットランドへの軍事費捻出をも行っていた。
64) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 192.
65) Clowes Wm. L., *The Royal Navy, A History from the Earliest Times to the Present*, Vol. 1, Repr. of 1897, ed., Ams Press, Inc., 1966, p. 207.

大商船隊を組織させることによって対イングランド戦に備えていた[66]。

そこでエドワード1世は，ガスコーニュを死守するために必然的に，大商船隊の組織つくりや，コルンワールからベルウィックまでの沿岸防衛を，父や祖父よりもヨリ現実的にしかもヨリ大掛かりな方法で進めていかなければならなかった[67]。

“模範議会”によって軍事的財政が確保でき，そしてそれを基盤にエドワード1世は，アキテーヌおよびガスコーニュを死守しながら，さらに失地回復を島内に求めた対スコットランド戦争および大陸に求めた対フランス戦争を続けた。対スコットランド戦争は，1296年ダンバーの戦い（Battle of Dunber）で勝利を得，スコットランドを掌中に収めた。だが，対フランス戦争は，一進一退を繰り返した。そこで，商業上重要なフランドルを掌握しようとエドワード1世は，1297年8月自己の軍隊をスロイスに上陸させた[68]。その1297年当時のエドワード1世の艦船保有数は，約58,000人を搭載できる305隻であった[69]。

イングランド軍がスロイスに上陸できた背景には，フィリプ4世とフランドル伯との衝突があった。フィリプ4世は，宗主であることを盾に取り，従順でないフランドル伯にヨリ強い“臣従の礼”を尽くさせていた。このことに反発したフランドル伯は，しだいにエドワード1世に近づき，彼に援軍を求めるようになった。このフランドル伯の行動に対しフィリプ4世は，フランドル所領を没収し，そしてスロイスも掌握した。結果は，フィリプ4世の弟アルト伯ロベルト（Robert of Artois）の活躍によりフランドル所領が完全に制圧され，エドワード1世の遠征は失敗に終わった[70]。

だがフランドル人は，自己の軍隊を組織し，1302年クールトレイの戦い

---

66) Tout, T. F., *op. cit.*, pp. 192−193.
67) Powicke, Sir M., *op. cit.*, p. 655.
68) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 210.
69) Hope, R., *A New History of British Shipping*, John Murray, 1990, p. 42.
70) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 205 and p. 210.

(Battle of Courtrai) で，フランス軍を打ち破り，彼らをフランドル外に追い出した[71]。でも，フランス王のフランドルへの介入は，断続的に続いていた[72]。その後のスコットランドでは，ロバート・ドゥ・ブルースが出現し，面と向かってエドワード1世に対抗するようになってきた。これらのことによって，ますます戦費がかさみ，エドワード1世の立場は，しだいに悪くなってきた。

1307年エドワード1世がスコットランドのロバート・ドゥ・ブルース討伐中に死したとき，四男のエドワードがイングランド王位を継承した。そしてそのエドワードがエドワード2世になり，1308年フィリプ4世の娘イザベル (Isabella of France) と結婚した。この結婚によって，1297年から続いていたアキテーヌおよびガスコーニュを死守するための対フランス戦争は，一応この1308年に終わった。またこのイザベルとの結婚によってイングランドが，フランスの王位継承権を主張できることとなった[73]。

そして，その後のイングランドとフランスとの関係は，友好的なムードに包まれていた。だが，これとは反対に，イングランドとフランドルとの関係は，しだいに薄れていった。というのは，フランドル伯のルイ (Louis, Count of Flanders) がフィリプ5世 (Philippe V，1316－1322) の娘と結婚したことによって[74]，フランドルがフランスとの関係をヨリ強めていったからである。

エドワード2世は，一介の騎士ピェール・ドゥ・ギャヴスタンを偏愛・寵愛したため，イングランド政府の統制ができなくなり，その結果1341年に，スコットランドのバノックバーン戦でロバート・ドゥ・ブルースに大敗を喫してしまった[75]。また，国政能力に欠ける彼は，辛うじて妻イザベルの努力

71) *Ibid.*, p. 221.
72) Powicke, Sir M., *op. cit.*, p. 669.
73) Hall, W. D., Albion, R. G. and Pope, J. B., eds., *A History of England and Empire-Commonwealth*, Fifth Edition, Repr. of 1971, ed., Robert E. Krieger Publishing Company, 1984, p. 118.
74) Moreton Macdonald, J. R., *op. cit.*, p. 226.
75) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 262.

によってガスコーニュ領を保有できたものの，その妻さえも，ピェール・ドゥ・ギャヴスタンに対する彼の利己的な行動のため，怒らせてしまった。

フランス内のガスコーニュ領は，イングランド王がフランス王に対して“臣従の礼”を尽くすという条件で，その支配権をフランス王から認められている所領である。そのフランス王に新王シャルル4世（Charles Ⅳ，1322－1328）が，1322年に即いた。だが，エドワード2世は，この“臣従の礼”を，その後の3年間も果たさなかった[76]。ではなぜ彼が3年間もの間，“臣従の礼”を果たさなかったのであろうかというと，彼にはその意志が全くなかったから，としか言えない。1324年に対フランス戦争が再燃し，ガスコーニュがフランス軍によって占領されてしまった[77]。そしてそれに対処するため彼は，急拠慌てて妻イザベルをフランスに向かわせた。もし彼が，この“臣従の礼”を認識し，そして重要視していたならば，彼は，彼自らがフランスに赴いていたであろう。

イザベルの努力，すなわちイザベルの和平協定案をシャルル4世が認めることによって，ガスコーニュのフランス軍は，一時的に引き上げることになった。この和平協定案の受け入れによってイザベルと皇太子エドワードとは，もはやフランスに滞在する公的理由がなくなった。だが，イザベルは，王室の権力闘争により，実権を握ったデスペンサー（Despenser）1家からフランスに追われていた身なので，イングランドには帰れなかった。

もしエドワード2世の妻イザベルがシャルル4世の妹でなかったら，アンジュー家とカペー家との大戦争が，ガスコーニュで繰り広げられたであろう。だが，大戦争ではないにしても，シャルル4世の協定違反により，再びガスコーニュの1部が戦闘状態に入った。というのは，イザベルが提案した和平協定の中で，ガスコーニュの所領がどこまでかを明示していなかったからである。そこでシャルル4世は，身勝手な協定解釈をし，アジネ（Agenais）

76）*Ibid.*, p. 297.
77）*Ibid.*, p. 296.

とラ・レオール（La Réole）とを自分の領土の1部にしてしまった[78]。

小さな小競り合いはあったものの，イザベルの努力によって大戦争は免れた。このことによってイザベルは，アンジュー王家そのものを救った人物として，評価しなければならないであろう。

アンジュー王家の存亡にとって最重要な人物イザベルを，エドワード2世は自分の利己的な生活態度から怒らせてしまった。イザベルのこの憤りは，しだいに夫エドワード2世に対して向けられ，そして彼の失脚を願う怨念となっていった[79]。また夫に対する彼女のこの憤りは，1325年3月シャルル4世に対する“臣従の礼”を果たした後，彼女および皇太子エドワードをイングランドに帰さなかった原因にもなった。

フランス滞在中のイザベルは，王室内で実権を握っているヒュー・ル・デスペンサー（Hugh le Despencer）が追放されない限り，ヘンリー2世との結婚を破棄し，1人で生きていくと兄たちに告げた[80]。その後，彼女は，夫を廃位に追い込み，そして息子を王位に即けることだけを念頭に置き，亡命貴族であり愛人でもあるマーチ伯ロジャー・ドゥ・モーティマー（Roger de Mortimer, 1st Earl of March, 1330年処刑）と手を組み，1326年イングランドに上陸した[81]。そのイングランドで彼女は，サフォックス（Suffolk）やエセックス（Essex）の有力な諸侯の前で，従順でない反国王派のランカスター伯トマス（Thomas, 2nd Earl of Lancaster, 1279－1323，ヘンリー3世の孫）の復讐とデスペンサー1家（父子）の失脚のためにやって来たと告げた[82]。

イザベルの願いは，デスペンサー1家の処刑および夫エドワード2世の降伏によって現実となった。そしてその結果，翌年1327年息子エドワードが即

78) *Ibid.*, p. 297.
79) *Ibid.*, p. 298.
80) McKisack, M., The Fourteenth Century, 1307－1399, in Sir George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 5, Repr. of 1959, ed., Oxford University Press, 1992, p. 82.
81) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 299.
82) *Ibid.*, p. 299.

位しエドワード3世になった。

エドワード2世は，利己的な政策および生活態度により，むだな内乱や対外戦争を引き起こしてしまった。このことによって，王室財政は，逼迫の一途をたどっていた。

Ⅲ．スロイス戦

1327年に15歳でイングランド王位を継承したエドワード3世には，多難な問題が控えていた。その1つは，母イザベルとその愛人マーチン伯ロジャー・ドゥ・モーティマーとの政治への干渉。2つ目は，財政再建。3つ目は，ガスコーニュおよびスコットランド問題である。

イザベルとモーティマーは，ヘンリー3世が幼王のため全権を掌握する摂政となり，イングランドを治めた。だが，イザベルとモーティマーは，イングランドの国益を無視して，自分たちの利益を確保するために，1327年にフランスとの講和を結んだり，また1328年にスコットランドのロバート・ドゥ・ブルースの長男デイヴィッド（後の David Ⅱ, de Bruce, 1329－1332, 1346－1371）とエドワード3世の妹ジョアン（Joan）とを結婚させたノーザンプトン条約（Treaty of Northampton）を締結した[83]。

このフランスとの講和，すなわち1327年の停戦協定は，エドワード3世が再びガスコーニュ公領を，シャルル4世によって認められるとともに，彼にとってかなりの出費を伴うものであった。すなわち，戦争賠償金50,000マルクと相続税60,000ポンドとを，シャルル4世に支払うことになった[84]。だがエドワード3世にとっては，多額の出費であっても，多大な利益を生み，また代々継承されているガスコーニュ領を保有する方が，大陸への野望のためにも得策であった。

なお翌年の1328年にシャルル4世が没し，男系が無かったので，フィリプ

83) *Ibid.*, pp. 304－305.
84) McKisack, M., *op. cit.*, p. 111.

4世の甥ヴァロア伯フィリプ6世（Philippe Ⅵ, de Valois, 1328－1350）がフランス王位を継承した。この王位継承に関してエドワード3世は，自分の母イザベルがフィリプ4世の娘なので，自分の方が王位継承権があるとして，フランスに抗議した。だがこのときエドワード3世は，この抗議をあまり強く行わなかった。というのは，多額の出費をしてまでも1327年の停戦協定を結んだばかりであり，財政的にも苦しい時期に，フランスの王位継承権ということだけでは，戦火を交えたくなかったからである。またもし戦火を交え敗北したとき，やっと手に入れたガスコーニュ領を再びフランスに奪われてしまうという危険性があったからである。

1328年のノーザンプトン条約は，対スコットランド戦の敗北により，もうこれ以上スコットランドからの進攻をを受けたくないとして結ばれた講和条約である。だがこの条約は，イングランドの一般国民からは敗戦，すなわち外交上の失敗によって結ばれた屈辱的な条約として“恥ずべき講和(Shameful peace)”と呼ばれている[85]。というのは，イングランド国民はスコットランドがイングランドに併合されることを願っていたのであるが，それとは反対にこの条約によって，スコットランドを1つの独立国[86]として認めざるを得なくなったからである。

財政再建に関しては，むだな経費を支出し，そして私欲を増やしている母イザベルとその愛人モーティマーとを逮捕することであった。すなわちエドワード3世は，イングランドの“王国の安全”のために，1330年モーティマー逮捕を決定した[87]。そしてモーティマーは，1330年10月19日に逮捕され，同年11月に処刑された[88]。モーティマーの処刑理由は，やはりエドワード3世以上の権力の行使および必要以上の政府への介入であった[89]。

---

85) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 305.
86) McKisack, M., *op. cit.*, p. 99.
87) Myers, A. R., ed., *English Historical Documents*, Vol. 4, 1327－1485, Oxford University Press, 1969, p. 52.
88) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 309.
89) Myers, A. R., ed., *op. cit.*, p. 53.

なお，スコットランドを1国の独立国，すなわちロバート・ドゥ・ブルースをスコットランド王として認めた“恥ずべき講和”条約によって，エドワード3世は，このロバート・ドゥ・ブルースから3年の分割払いで，20,000ポンドを受け取ることになっていた[90]。

またエドワード3世は，財政再建のカギとして，フランドルとの貿易の安定・増加，すなわち“海上の覇者（Lord of Sea）”[91]を考えていた。イングランドの最大輸出商品は，羊毛である。イングランドは，この羊毛をフランドルに輸出する。そしてフランドルは，輸入したこの羊毛を毛織物に製造し，各国に輸出する。このイングランドとフランドルとの羊毛貿易は，両国にとって多大な利益が上げられる事業であった。そこでイングランドでは，この貿易の安全・増加のためには，フランドルへの介入をも辞さない態度であった。またフランドル人にとっても，貿易相手であるイングランドの方をフランスよりもヨリ友好的に付き合っていた。

当然フランドルの貿易商人は，裕福でかなりの権力を持っていた。貿易商人が裕福で権力を有すると，その諸都市は繁栄し，そして諸都市そのものが権力を有するようになってきた。その結果，フランドル伯が諸都市に介入するようになってきた。すなわち，経済的な問題においてフランドル伯と諸都市とが対立するようになってきたのである。この対立において，フランドル伯に手を貸したのがフランスであるのに対して，フランドル人に援助を与えたのがエドワード3世であった[92]。イングランドとフランドルとの関係は，このような経済的つながりよりも，むしろその後しだいに軍事的かつ政治的つながりの方を強くしていった[93]。

エドワード3世は，祖父エドワード1世治に後退したスコットランド問題

90) McKisack, M., *op. cit.*, p. 99.
91) Higgins, A. P., “International Law and the Outer World, 1450−1648”, in J. Holland Rose, A. P. Newton and E. A. Benians, eds., *The Cambridge History of the British Empire*, Vol. 1, The Old Empire from the Beginnings to 1783, Cambridge University Press, 1929, p. 197.
92) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 327.
93) McKisack, M., *op. cit.*, p. 120.

を，解決する必要があった。すなわちジョン王時代に失地回復のため，島内にその領土を求めたスコットランド征圧である。その政策としてまず始めに彼は，エドワード・ベイリャル（Edward Balliol, 1332. 8月－12月，1333－1346？）を1332年にスコットランド王に即けた[94]。この政策，すなわちスコットランドの遠征は，ヨリ多くの領土を求めるというよりも，イングランドの主権をスコットランドに認めさせるという傾向の方がヨリ強かった[95]。スコットランド征圧のためエドワード3世は，再度戦いに臨み，1333年のハリドン・ヒル（Halidon Hill）の戦いで勝利を得た[96]。そして彼は，スコットランド南部をイングランドに併合するとともに，再びスコットランド王としてエドワード・ベイリャルを1333年に即位させた[97]。このハリドン・ヒルの戦いは，まず始めにエドワード3世が敵に包囲された味方を援護するために，アーチェリー隊と歩兵隊とを装備した500人の軍隊を組織したことから，勝利を収めることができた[98]。

エドワード3世の妹を妻に持つスコットランド王デイヴィッド2世は，ハリドン・ヒルの戦いに敗れ，そしてエドワード3世の傘下に入れば何ら問題は起こらなかった。デイヴィッド2世は，エドワード3世に対して“臣従の礼”を尽くすどころか，当時友好国であったフランスに助けを求めた。

このことはイングランドにとって何を意味しているかというと，フランスおよびスコットランド問題がヨリ複雑となり，この問題を解決させるためには，もはや話し合いや小競り合いではどうしようもなく，力によってしか解決できないということを意味していた。

フィリプ6世は，いままで続いたフランス王家のカペー家の1員ではなく，ヴァロア家の初代の国王である。エドワード3世は，イングランド王家のア

94) Myers, A. R., ed., *op. cit.*, p. 56.
95) Ranke, L. Von, *A History of England, principally in the Seventeenth Century*, Vol. 1, Ams Press, Inc., 1966, p. 70.
96) Lang, A., *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol. 1, Repr. of 1903, ed., Ams Press, Inc., 1970, p. 248.
97) *Ibid.*, p. 250.
98) Myers, A. R., ed., *op. cit.*, p. 57.

ンジュー家の1員であるが，母イザベルがフィリプ4世の娘であったから，カペー家の血を引く人物でもあった。そこで，フランス王位をカペー家が継承する限り，エドワード3世は，そのフランス王位継承権を主張できる立場にあった。だが，フランス王家がカペー家からヴァロア家に代わったということは，フランス王家に対するエドワード3世の血縁関係が断たれたということ，いいかえるとエドワード3世はもはや，フランスの王位継承権を主張できなくなったということを意味している。

フランスの王位継承権に対する主張をエドワード3世は，1328年のフィリプ6世即位時に行っている。だが彼は，当時多額の出費までして締結したスコットランドとの1327年の停戦協定後，また財政逼迫の折から，極端に抗争を嫌い，フランスの王位継承権をあまり強く主張しなかった。

またフランス王家がヴァロア家に代わったということはフランスにおける対イングランド政策が変わったということをも意味している。すなわちエドワード3世と血縁関係のないフィリプ6世は，スコットランドと同盟を結び，徹底的にイングランドを攻略しようと出た。

フィリプ6世は，1336年に封臣であるフランドル伯に命じて，フランドルに滞在しているイングランド人に対して，商業的かつ伝統的な結び付きにかなりの規制を加え，迫害させていった[99]。具体的には，イングランド商人の監禁とイングランド商品の差し押えである[100]。これに対してエドワード3世は，1337年にイングランドとフランドル伯の下臣が行っているすべての商業的関係を禁止させる処置を取った[101]。この禁止の具体的商品は，羊毛の輸出禁止である。エドワード3世は，対フランス戦争を避けるために，フランスに大使を送ったが功を奏さなかった[102]。

その結果フィリプ6世は，フランス内のイングランド領ガスコーニュとポ

---

99) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 331.
100) McKisack, M., *op. cit.*, p. 120.
101) Tout, T. F., *op. cit.*, pp. 331－332.
102) cf. Myers, A. R., ed., *op. cit.*, p. 61.

ンティユーとの没収を，1337年に宣言した[103]。これによってフランドル伯ルイは，フランドルのカザント島（Flemish island Cadzand）に守備隊を配置し，そしてフランス海軍の水兵たちが，イングランドおよびサセックス，ハンプシャの海岸都市を略奪し始めた。これに対処するためにエドワード３世は，1337年秋にフランスへの宣戦を布告した[104]。

1337年フランスに宣戦布告したエドワード３世は，ウォールター・マニー（Sir Walter Manny）に命じ，フランドルのカザント島を攻撃させ，フランドル伯の義理の弟を捕虜にした[105]。このカザント島の攻撃は，当然商業上重要なフランドルを制圧，確保するための第一歩であり，またスロイス戦への第１歩でもあった。

この両国の争いに危機感を持ったローマ教皇は，平和的解決のために外交努力を行ったが，結果は実を結ばなかった。その後，イングランドとフランスとの敵愾心は，ヨリ一層度を増していった。

エドワード３世は，ただちに対フランス戦争のため，イングランド艦船の整備，増強に入った。彼の念頭には，すべての外国船舶を，規制下に置こうという考えがあった[106]。その具体例として彼は，1338年７月12日に自分の８歳の息子コーンウォール（Duke of Cornwall）に，イングランド国防長官を命じた[107]。その２，３日後に，戦艦クリストファーがオーウェルからスケルト川河口に向かって出航して来た。

戦艦クリストファーをはじめ，ここスケルト川河口に多くの艦船および商船が集結したため，ここにイングランド王立艦隊（The Royal Fleet）が生

---

103) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 333.
104) *Ibid.*, p. 334.
105) *Ibid.*, p. 334.
106) Higgins, P., "The Growth of International Law, Maritime Rights and Colonial Titles, 1648－1763", in J. Holland Rose, A. P. Newton and E. A. Benians, eds., *The Cambridge History of the British Empire*, Vol. 1, The Old Empire from the Beginnings to 1783, Cambridge University Press, 1929, p. 555.
107) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 335.

まれた[108]。このエドワード3世の王立艦隊は，イングランド王立海軍（The Royal Navy）の始まりである。また，このRoyal Navyという言葉を最初に使ったのは，チャールズ2世（Charles II，1660－1685）である。

エドワード3世は，1338年7月16日イングランド王立艦隊をスケルト川河口に集結させるとともに，妻と子を連れ，アントワープの主要な港ブラバントに船で渡り，そしてそのアントワープの¼を支配し[109]，フランドルの地に上陸した。上陸した彼はその地で，フランス王に誓約したすべての事柄を無効にすると告げた[110]。だが，この1338年にターメス（Thames）の入り口，すなわちミッドルブルク（Middelburg）沖にフランス艦隊が集結していて，フランスによって戦艦クリストファーおよび4隻の船舶が拿捕されてしまった。いいかえるとイングランドは，その年度の羊毛収益を持った船舶や，イングランドにおいて最新で最大級の300トン戦艦クリストファーとその姉妹船の戦艦エドワードなどが，フランス艦隊によって拿捕され，財政的な大打撃をこうむらされた[111]。なおこの戦艦クリストファーとエドワードとは，その後フランス艦隊の中に組み込まれた[112]。そしてこのことによって，1339年イングランドのドーバとフォルクストーンがフランス艦隊によって攻撃されてしまった[113]。

そこでエドワード3世は，1339年9月12,000人の軍隊を引き連れフランドルを侵略し[114]，そして正式にフランスの王位継承権を要求した[115]。この要求に対してフィリプ6世は，直接的な反応を見せなかった。だがエドワード3世は，フランスの私拿捕船がイングランド海峡に横行したり，またフィリプ

---

108) *Ibid.*, p. 335.
109) McKisack, M., *op. cit.*, p. 127.
110) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 335.
111) Neillands, R., *The Hundred Years War*, Repr. of 1990, ed., Rutledge, 1991, p. 82.
112) *Ibid.*, p. 82.
113) McKisack, M., *op. cit.*, p. 128.
114) Myers, A. R., ed., *op. cit.*, p. 65.
115) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 337.

6世が北部沿岸の防衛を強化していたので，強引にフランドル人と同盟を結んだ[116]。彼のこの強引な同盟には，当然フランドルでの軍事費や食料品の不足を起因としている。

またエドワード3世は，フランドルを味方に付ける1手段として，毛織物業者の代表取締役ファン・アルテヴェルト（van Arteveldt）に，羊毛の輸出禁止解除を約束した。このことによって，アントワープからブルゲリに運ばれる羊毛の安全のために，フランドル人にイングランドから140,000ポンド支払われることになった[117]。すなわち彼は，フランドルの毛織物業者たちを，イングランドの保護下に置いたのである[118]。

さらにエドワード3世は，1340年1月25日再度フランドルに行き，翌26日にここガン（Ghent）において，自分がフランス王であることを宣言した[119]。この宣言によって彼は，形式的に“イングランドとフランスとの王”に即いた[120]。そして，フランドル人がエドワード3世をフランス王として認めることは，フランドル伯に対する都市自体の反乱に有益な正当性を与えた[121]。この宣言後，エドワード3世は，イングランドに戻り，戦争のための本格的な準備を始めた。

このことに対してフランス側でも，フランドルの多数の貴族がエドワード3世支持派に回ったために[122]，本格的な戦争準備に入らなければならなかった。すなわちフランスは，カスティリヤ（Castilian）艦隊とジェノバ

---

116) McKisack, M., *op. cit.*, p. 127.
117) *Ibid.*, p. 128.
118) Carus-Wilson, E., “The Wollen Industry”, in M. M. Postan and E. Miller, eds., *The Cambridge Economic History of Europe*, Vol. 2, Trade and Industry in the Middle Ages, Second Edition, Repr. of 1952, ed., Cambridge University Press, 1987, p. 676.
119) Tout, T. F., *op. cit.*, p. 344.
120) Ormrod, W. M., *The Reign of Edward Ⅲ : Crown and Political Society in England 1327−1377*, Yale University Press, 1990, p. 10.
121) Curry, A., *The Hundred Years War*, Macmillan Press Ltd., 1993, p. 57.
122) *Ibid.*, p. 58.

(Genoese) 艦隊とを仲間に入れた[123]。この両艦隊は，経験豊富な船員によって操作されたきわめて優秀な艦隊であった。そしてフランスは，1338年に拿捕した戦艦クリストファーおよびエドワード，それにあと優秀なイングランド戦艦3隻を，フランス艦隊に組み込み，着実に自国艦隊の増強を図っていた。

これに対してイングランドは，イングランド最大級300トンのクリストファー戦艦およびエドワード戦艦をはじめ優秀な戦艦を，フランスに拿捕されていたため，何の軍艦をも保持していなかった。ただある軍用船としては，貿易船，すなわち深い喫水を持ち丸い船体の商業船であった[124]。これらの商業船は，すべて貿易業者から取ったものであり，またそれらを，船首と船尾に木の楼を取り付け，さらにマストの上に直立した船艙甲板を加え，軍用船に変えたものである[125]。

商業船をこのように軍用船に変えた理由は，フランスの軍艦の舷側に対して，アーチェリー隊が矢を放ち，水兵が石を落とすためであった[126]。軍用船の中には，25人ぐらい水兵とアーチェリー隊とが乗っているような，海戦における主要な兵器を持っていた船舶がいた。だが，1340年代ではもうすでに，いくつかの軍用船，たとえば戦艦クリストファーやエドワードなどの戦艦の中には，大砲を装備していたものもあった[127]。

1340年6月22日エドワード3世は，フランス艦隊がスロイス沖に陣を取っているという情報をつかみ，自ら旗艦トーマスに乗船し，サフォックにあるオルウェイの小さな港から遠征に出た[128]。イングランド王立艦隊は，エドワード3世が率いる200隻とノーザンプトン伯が率いる50隻を含めて，250隻の

---

123) Neillands, R., *op. cit.*, p. 82.
124) *Ibid.*, p. 83.
125) *Ibid.*, p. 83.
126) *Ibid.*, p. 83.
127) *Ibid.*, p. 83.
128) Seward, D., *The Hundred Years War : the English in France, 1337–1453*, Repr. of 1978, ed., New York : Atheneum, 1982. p. 42.

艦隊であった[129]。これらに軍用船は，ときに200トン級の大戦艦もあったが，ほとんど30から40トン級のコング船，すなわち商船であった[130]。

これに対してフランス艦隊は，380隻の大艦隊であった[131]。このフランス艦隊，すなわちフランスースペインージェノバの同盟艦隊は，イングランドよりもヨリすぐれた船舶操作術や作戦において，余裕を持ってツウン海峡の入口に停泊していた[132]。

その1340年6月23日の夜，エドワード3世は，フランス同盟艦隊の様子を探るために，2人の王室新興騎士コブハム（Sir Reginald Cobham）とチャンドス（Sir John Chandos）とを上陸させ，フランドル人と接触を持たせた[133]。その報告によると，フランス同盟艦隊は，船舶の数が非常に多く，またその船舶のマストは大きな木で建造されており[134]，さらに3つの横陣を取り，その中に元イングランド艦船であった戦艦クリストファーが含まれていたということであった[135]。この報告によって，イングランド王立艦隊は，戦艦クリストファーの奪回に強く駆り立てられ，兵士の士気を向上させた。

そして，翌1340年6月24日土曜日朝5時，ついにスロイス戦が始まった。

エドワード3世は，3つの横陣を張っているフランス艦隊に対して，アーチェリー隊と兵士1個師団とを乗船させているイングランドの戦艦2隻を向かわせた[136]。2隻の戦艦が風を受け太陽を背にして[137]，敵陣に突入することによって，イングランド王立艦隊が指導権を取った[138]。

---

129) Clowes, Wm. L., *The Royal Navy : A History from the Earliest Time to the Present*, Vol. 1, Repr. of 1897, ed., Ams Press Inc., 1966, pp. 250−251.
130) Seward, D., *op. cit.*, p. 42.
131) Clowes, Wm. L., *op. cit.*, p. 251.
132) Neillands, R., *op. cit.*, p. 83.
133) *Ibid.*, p. 83.
134) Seward, D., *op. cit.*, p. 43.
135) Neillands, R., *op. cit.*, p. 83.
136) *Ibid.*, p. 84.
137) Myers, A. R., *op. cit.*, p. 69.
138) Seward, D., *op. cit.*, p. 44.

指導権をとったイングランド王立艦隊は，アーチェリー隊の矢が届く距離を計算に入れ，徐々にフランス同盟艦隊に近づいて行った。敵艦の舷側に近づいたイングランド戦艦は，イングランド兵が敵艦に乗り移り安全が確保されるまで，アーチェリー隊による攻撃をし続けた。すなわち，味方の兵士が敵艦に乗り移り勝利が確定するまで，アーチェリー隊がマストの上にある高い楼から，矢を放ち続けたのである[139]。アーチェリー隊の活躍によって，カスチール艦隊の多くの艦船を撃破することができた[140]。このことによりイングランド王立艦隊は，戦艦クリストファーおよびエドワード，そしてそれ以外の戦艦多数を奪回することができた。また，泳いで陸に逃げて行ったフランス人やカスチールの兵士たちは，待ち構えていたフランドル人によって，浅瀬で捕えられ棍棒で殴られた[141]。

スロイス戦の勝敗の行方は，最初の2時間で決まり，アーチェリー隊を乗船させていたイングランド王立艦隊の大勝利で終わった。

この1340年のスロイス戦は，あっけなくイングランド王立艦隊の勝利で終わったが，これでフランス艦隊が壊滅したわけではなく，その後も対フランス戦争は続いた。またスロイス戦の4年後の1347年に，イングランド王立艦隊は，738隻の約15,000人の兵士を保持する大艦隊まで増強されており[142]，エドワード3世は，着実にイングランド王立海軍への途を歩み続けていたのである。

Ⅳ．おわりに

1340年のスロイス戦は，フランス王国内で封建宗主であるフランス王よりも，下臣が強力になったことに起因する。すなわち，フランス王家であるカペー家およびヴァロア家よりも下臣であるイングランド王家のノルマン家お

139) Neillands, R., *op. cit.*, p. 84.
140) Curry, A., *op. cit.*, p. 58.
141) Neillands, R., *op. cit.*, p. 84.
142) Hope, R., *op. cit.*, p. 42.

よびアンジュー家の方が，ヨリ強力で巨大化になったからである。

このスロイス戦において両国は，多大な犠牲を払った。そしてその中でイングランドは，今後イングランド王立海軍となるべきイングランド王立艦隊を，エドワード3世治に組織した。このことは，イングランド経済史上，多大な影響を与えた。もしエドワード3世がフィリプ6世の権力に屈していたならば，当然イングランド王立艦隊が組織されていなく，イングランド王立海軍が存在していなかったであろう。そこでエドワード3世は，多大な犠牲を払ってまでも，フィリプ6世の権力に屈することなく，ヨリ強いイングランド王立艦隊を組織させていったのである。すなわち，このイングランド王立艦隊は，イングランド海峡を制覇したイングランド王立海軍への第1歩であったといえるのである。

また経済史上，もしこのスロイス戦でイングランド王立艦隊が敗北していたならば，当然イングランドの重要輸出商品である羊毛の買い取り先がなくなっていたであろう。あるいはそうでなかったとしても，少なくとも輸出先であるフランドルとの貿易に，何らかの規制を加えられたであろう。さらにこの敗北は，イングランド海峡の制海権が奪取できないということであり，また貿易が脅威にさらされるということでもあった。このことは当然，ガスコーニュのワイン貿易にも影響がでて，イングランドではそのワイン価格がかなり高くなったであろうということを意味している。でも，このスロイス戦に勝利したイングランドは，フランドルへの輸出をヨリ安全に行うことができたし，またガスコーニュとのワイン貿易を加速的に増加させることができた。

この2つの事柄を考えても，この1340年のスロイス戦は，イングランド経済史上，大変重要な意義を持っていたといわざるを得ないのである。